

地域指定校の教員より

★ 85%の教員が、副籍制度が共生社会の形成に意義があると考えている。

★ 69%の教員が、小・中学校の主体的な取り組みが必要であると考えている。

- 学校便りを交換するという程度の交流しかできていないので申し訳なく思っている。互いに理解を深め合える交流の仕方を今後考えていきたい。
- 地域に住んでいる同じ年の児童・生徒なので、お互いに顔を知っていたほうがよい。
- 直接交流をしているときの、学級の児童・生徒の優しい態度が嬉しい。
- 特別支援学校の児童・生徒が学級の児童・生徒たちに出て嬉しさを表現してくれることで、学級の児童・生徒たちが迎えることの良さを感じることができる。
- 継続することにより、児童・生徒たちはより信頼関係を深めていけると感じる。
- 児童・生徒にはとても良い経験となった。支え合って共に生きることについて考えることができた。
- 副籍は、担当学級だけでなく、全校の児童・保護者に理解・啓発を求めていきたいと考えている。
- 交流が進んで、現在のように保護者付き添いの参加ではなく、児童・生徒だけで参加できればよいと思う。
- 副籍制度は双方の生徒にとって共生社会への一歩となる良い経験ができる制度であり、中学校側の受け入れ体制が整っていれば、もっと直接交流を進めていてもよい。

特別支援学校の教員より

★ 79%の教員が、副籍制度が共生社会の形成に意義があると考えている。

- 障害についての「出前授業」を事前に行うと、指定校の先生や児童の理解がぐっと深まるように感じた。
- 保護者に対しては、「将来地域で生きる」という副籍制度の意義を一層打ち出して行ってもよいのではないか。
- 地域の中に顔見知りをつくる。こういう子が住んでいると分かってもらうことは意義があると思う。副籍を希望する家庭には、できる限りお手伝いしたい。
- お互いの教員が忙しい中でも、思いやりをもってやり取りする気持ちをもつ。気持ちがつながっているなど感じられるときは、副籍交流の意義を感じる。
- 副籍をどう進めていくのか。地域指定校、保護者、特別支援学校合同の研修会が設定できるとよい。
- 交流をして「いいな」と感じた体験を伝える機会があるとよい。

3 アンケート調査の結果（自由記述）から（抜粋）

※ 文意を変えない程度に文章を修正しています。

(1) 副籍制度を利用している児童・生徒の保護者から

ア 副籍制度を利用して良かったと思うこと

- 近所でよく声をかけてもらえるようになった。また、障害があることについても良く理解してくれているように感じる。地域で過ごしていくなかで、大事な一步を踏み出せたと思う。
- 交流は低学年のうちから始め、続けていくことが大事だと思い、実践してきた。それなりの地域とのつながりができたと思う。
- 直接交流を続けていくうちに少しずつクラスのお友達の前で発表ができるようになってきて、子供の成長を感じる。顔を覚えてもらうことにより、学校以外の場所でも声をかけてもらえたり、遊んでもらえるようになったので、とても嬉しく思う。
- 外出時に交流しているクラスのお友達と出会うと必ず声をかけてくれたり、公園で会った時には一緒にかくれんぼやボール遊びに混ぜてくれたこと。
- 中学では直接交流は無理かとあきらめていたが、やれるところまでと始めてみたら、みんな笑顔で迎えて自然と接してくれるので、娘も毎回楽しんで過ごしている。やめなくてよかった。
- 子供の社会性を広げる大きな経験になっていると、2年目・3年目を経験して実感した。最初は教室に入ることもできなかったのに、今は自分から進んで教室に入り挨拶ができています。学校外でも交流校の生徒が子供の名前を呼んで挨拶してくれる。地域に少し存在感を感じる。地域の集まりでも親同士が知り合いになれ、行事に参加しやすくなった。
- 地域の子供たちがいろいろなところで声をかけてくれるので、地域に溶け込んでいる感じがする。図書館で4～5人の子供達が声をかけてくれたこと。親はわからないが、子供は嬉しそうだった。
- 校舎内で車いすの上げ下ろしの手伝いを率先してやってくれる生徒がいた。
- 通常の学級の子供たちが名前を覚えてくれて、休みの日などに近所で会ったりした時に、すぐに声をかけてくれたり、「学校でまた待ってるね」と嬉しい言葉をかけてくれる。子供もすごく喜んでいる。
- 近所を歩いていると、子供たちが名前を呼んで、声をかけてくれる。近くに、障害をもった同級生がいるということを認知してくれた。
- 道徳の時間に我が子のことを取り上げてくれ、母親がゲストティーチャーとして1時間、子供の障害、生活について講義する機会をもらった。地域指定校の子供たちの理解も進み、よりよい交流につながったと思う。
- 小6の最後の授業で我が子のことについて話をさせてもらった。その時に分かった（嬉しかった）ことは、クラスの友達が、我が子を障害者という意識ではなく「友達」と思っていてくれたこと。
- 副籍を利用したことによって、自分の子供の成長を感じることができた。同年齢の子供達と接したことで気付くことが多かった。
- 障害についての子供たち（健常者）の理解が少しずつではあるが増えていること。同じ地域に住んでいながら別の学校に通っているため近くに友達がいなかったが、副籍によって声をかけてくれる友達が多くなったことは良かったと思っている。
- 我が子が楽しめる（参加できる）よう、授業内容を工夫してもらえてよかった。地域指定校の校長先生、副校長先生、担任の先生がいろいろと配慮してくれて感謝している。
- 毎年、運動会に参加させてもらっている。同学年の保護者・生徒だけでなく他学年の保

- 護者や生徒も「去年よりできた」など成長の発見をして、それを声に出して伝えてくれた。子供と母親をセットで覚えてくれているので、地域の中で認識が広まって助かっている。
- 担任の先生が、訪問前に子供の写真つきプロフィールを作成してくれたので、交流先の子供達が温かく迎えてくれた。校門のところで「〇〇君来た！」と案内してくれたことに感動した。
 - これまで不思議そうな顔で通り過ぎていた同じマンションの子供たちが声をかけてくれるようになった。
 - 自宅周辺で声をかけてもらうようになった。地域にも、障害があっても同じように暮らしている、当たり前で生活しているということを知ることが出来るよい機会だと思う。障害者、健常者と分け隔てのない社会が、子供の頃から受け入れられるようになってもらえればよいと思う。
 - 音楽の授業に参加させてもらった時、グループに分かれて練習する際に、児童から「〇〇さんはどのグループですか」と発言があり、クラスの一員として認められているような自然な雰囲気が年を追うごとに感じられ、他の児童も楽器を次々に持って来てくれたりと温かく接してもらっている。
 - 回数を重ねるたびに声かけが積極的になってくるのを感じる。子供の間には壁はないと実感する。相手の子供達は集団として関わり、こちらは単独。初めはびっくりして戸惑っていたが、5年目くらいからやっと慣れてきたように思う。長い時間がかかった。
 - 「障害のある子」との接し方が自然になっている。以前はじろじろ見られたりがあったが、今は声を掛けてくれる子が増えて嬉しい。
 - 道ですれ違った時に「あっ」と言って気に留めてくれている児童がいることが分かった時などは、交流の効果を感じている。
 - いつも子供たちがゲームの内容、進行役等を考えてくれている。大人が考えたことをやるのではなく、子供達が考えてくれることが嬉しく思う。
 - 1年目の頃、スーパーマーケットで買い物中にはぐれてしまい、地域指定校の子供たちが一緒に探してくれた。
 - 自宅近くで姿が見えなくなった時、「あっちにいたよ」と教えてもらった。地域で顔を覚えてもらうのは重要だと思う。
 - 家からいなくなった時、交流校の子供たちが「〇〇君だ」と交流校に連絡してくれたので、すごく助かった。
 - 交流一年目の先生は、さり気ない気配りのとても上手な先生であった。その先生を見て、子供たちも同じように接してくれたのが印象的で、先生の影響の大きさを実感した。
 - 小学生の時、交流先のクラスの子供が「うちのクラスの子」と母親に伝えていたことが嬉しかった。
 - お友達との関わりの中で、自分でやらなければいけないことを何となく感じてくれたようで、「自分でやる」という気持ちが湧いてきた。
 - 地域指定校の先生に理解してもらい、とても密に交流できたので、交流に行くとお客様ではなくクラスの一員のようなようになった。交流校で児童から、「そう言えば〇月〇日は〇〇ちゃんの誕生日なんだよ」と言い、自発的にクラス全員の子供がバースデイカードを一枚一枚書いてくれて届けてくれた。その時、交流校の先生のメッセージに「〇〇ちゃんがいるとクラスみんなが優しい顔になる」と書いてくれた。社会に何も貢献できないと悲観せず、積極的にふれあうことでお互いに刺激や思いやりの心を持つ。子供は大人が考える以上に素直に受け入れてくれた。
 - 親子行事の案内が届き、親子調理に参加できた。子供の得意分野なので楽しく過ごすことができた。
 - 毎回、交流前は「うまくいくかしら」と少々不安になるし、交流中でもうまくコミュニ

ケーションがとれていない場面などはハラハラするが、それ以上にお友達が我が子を気遣い、どうすれば上手にできるかを考え、手助けしてくれている場面がたくさんあるのはとても感動する。

- 普段、障害者と接していないと「特別な子」「変わった子」と思われがちだが、見慣れてくると「こういう子もいるんだ」と特別視しなくなっているように思う。
- 副籍交流をしている子のお母さんに、「普段は学校であったことをあまり話さないですが、交流した日はとても楽しそうに話してくれるので、とても貴重な機会親子で楽しんでいる」と言われた。
- 交流校の子供が「話していることは理解できるの?」、「御飯は食べられるの?」、「〇〇はできるの?」など、大人では「悪いかな」と思って聞けないことも気持ちよく質問してくれるので、伝えることができ理解につながるの嬉しい。
- 交流先の先生が、生徒たちをととても上手に指導してくれたおかげで、生徒たちみんなが優しく出迎えてくれてよかった。
- 交流校の担任の先生の事前準備が素晴らしく、スムーズに受け入れてもらえ、学校外で会っても声をかけてもらったり、交流そのものが充実していた。
- 交流校の副校長先生や事務室の職員の方まで気持ちよく協力してくれ、階段上の教室へ車いすごと本人を運んでくれた。子供たちからも「次はいつ来るの?」と会うたびに聞かれるし、握手をすんなりしてくれる。
- 校長先生をはじめ、地域指定校の先生方が温かく迎えてくれて嬉しい。
- 積極的に交流したいが、付き添いのために休暇を取らなければならないので、土曜日の学校公開の日に呼んでもらえたのは助かった。他の父母とも交流できた。今後も学校公開の日に呼んでもらえると助かる。
- 年度始め、交流校の先生方と打ち合わせの時、先方から「今年は去年と違ったことをしましょう! 同じことをしても仕方ないから!」と、積極的にいろいろと提案してもらった。受け入れ側の対応によって、どんな交流ができるかが変わってくる。先方の校長先生の意向で対応が変わるのは事実だと思う。その違いがなくなればよいと思う。

イ 副籍制度を利用して残念に思ったこと

- 地域指定校の交流学級の担任の先生以外は、我が子が何をしに来ているのか知らない様子だった。転校生と勘違いされた。
- 交流するだけでなく、なぜみんなと違うのかという説明をする必要があると思う。我が子の行動や言動に「気持ち悪い」、「怖い」という言葉がとても悲しかった。
- 初めての副籍の交流の時、学級担任の先生がすべて児童任せで、最初と最後の挨拶以外は子供と関わってくれなかったことがとても残念であった。
- 障害について理解をしようと頑張っている先生がいる反面、まったく考え方の違う先生に見てもらった時は、「こういう子は自分のレベルに合った所で学ぶのが一番いいのだから、わざわざ大変な思いをさせるのはどうか・・・」と言われた時は残念であった。
- 小1~4年生くらいまではとても仲良く話ができたり、遊んだりできた。しかし、高学年になると少し大人になり、会話もあまりない。交流に行っても、子供は楽しいみたいだけれど、親の私は進んで副籍に行く気になれなくなってきた。
- 学校側の受け入れ体制は、管理職の先生に大きく左右されやすいということ。
- 毎年、教員など体制が変わる度に内容が変わること。正確に引き継がれていない。
- 副籍交流をしているクラスの子供達は受け入れ態勢が整っているが、他のクラス、学年、保護者には迷惑な態度をされた。
- 教員が無反応だと、子供も知らん顔である。
- 学年が変わり、相手校の担任が変わると、引き継ぎがされていないこと。
- 毎年、一学期が打ち合わせにあてられ、実はこの一学期まるまる空くことが生徒たちか

ら心が離れ（お互いに）、また一からの出発になるのが残念。

- 相手校の先生方が副籍を理解していないようで温度差を感じる。以前、通常どおり相手校へ登校したら、インフルエンザで学級閉鎖になっていた。こちらには知らされていなくて、寂しい気持ちになった。
- 受け入れる学校側の副籍への理解が薄い。制度意義や学校の努力の程度など十分に理解の上での受け入れでないと、安心して副籍制度が利用できない。
- 交流を希望して、一度は受け入れOKと言われたのだが、その後断られた。

ウ 副籍制度の充実に向けた意見・要望など

- この土地・地域に住む以上、障害をもつ子供及び親の認知度を高めることが必要だと思う。相互理解を深める場として、副籍制度は起点になる一つのきっかけになるのではないかな。
- 手続きをもっと簡単にして欲しい。交流を始めるまでに時間がかかり過ぎる。
- 継続の場合は、手続き不要で4月から交流を開始できるようにして欲しい。
- まだ利用していない人はイメージがつかめないのかも知れない。体験記とか、どんな交流をしたのかとか、具体的に知ることができれば直接交流を試みようという人が増えるかも知れない。
- 受け入れる側の理解がなければ形ばかりになってしまうので、交流を始める前に指定校の教員（担任の先生）に一度特別支援学校に来てもらい、日頃の様子や勉強の仕方、取り組み方とか関わり方を見ることで、副籍に生かして欲しいと思う。
- 月1回（学期1回）程度の交流では少ない。もっと回数を増やしたい。
- この制度が始まり、ずっと継続している。今年度が中学部最後のため、交流を終了するに当たり、「継続は力なり」と思った。大きな成果があったということではなく、1年後・5年後・10年後…の後に続く人々（地域指定校の生徒も含め）のために、少しでも役に立てたかと思うからである。障害児のためだけの制度ではなく、地域全体のための制度で、障害児が社会貢献しているという認識が定着するとよいと思った。
- 中学校の授業で、「障害について」や「共生社会に向けて」などについて取り扱ってはどうか。該当学年に留まらず、学校全体で考え、学ぶことが必要かと思う。
- 母親ではなく、慣れているヘルパーさんなどに付き添ってもらえると、子供も甘えずに頑張るのでよいと思う。
- どうしても、付き添いなど、保護者に負担がかかる。制度の充実にはそのあたりがネックになっているのではないかな。
- 特別支援学校の子供にとっても、地域指定校の子供にとっても、「ちょっと自分と違う子供がいる」という認識ができることは、子供の世界観を広げるよい機会になる。
- もう少し頑張って「障害児」に対する理解を深めてもらうような取組をすればよかったかなと思う。これはきっと親が意見を出して、積極的に両校のコーディネーターの先生方に働きかけなくては実現できないのだと思う。小学生のうちにやりたかったが、親も忙しくて後回しにしていたら6年生になってしまった。親としての反省点である。
- 共生社会を望む特別支援学校や保護者側と、受け入れ学校の地域指定校では、まだまだ温度差があるように感じる。地域指定校にも、毎年、特別支援学校の児童との交流があるのが当たり前というくらいに定着すれば、受け入れる側の学校や先生方の意識や理解度も変わっていくのではと思う。
- 副籍校との交流が充実できるかどうかは、副籍校の担任の先生の協力・理解が大切だと思う。ただ受け入れるだけでなく、クラスや学校に対し、関わりのサポート、障害児（受け入れ児）に関する情報の発信をして欲しい。
- 副籍制度の充実・交流ができることは大変ありがたいが、本当に本人が望んでいるのかなど悩む。副籍校の状況もあると思うが、幾度かの面会の実施など、少しずつ入っていけ

ると互いに受け止めやすいのではと感じた。

- 同じように学べないので特別支援学校に通っている。なのに、いつもの授業に参加するスタイルはおかしいと思う。お互いに「何ができて、何ができないのか」を知り合う時間をもてるようにしないといけないと思う。学業に拘る必要はない。
- 交流先の学年やクラスの先生によってもものすごく差がある。丁寧な対応をしてくれる先生もいれば、全然知らん顔で、何の対応もしてくれない先生もいる。学校全体として協力して受け入れてもらえるとうれしい。
- 高学年になると子供の体も大きくなり、バリアフリーでない相手校へ行くのが大変になってくる。子供たちも手伝ってくれるが、車いすはとても重く、3階の教室まで行くのが困難である。副籍交流と簡単に言うが、相手校のバリアフリー化、先生方の理解等、数々の協力がないと難しい制度だと思う。
- 地域指定校の保護者にも副籍制度という取組を行っていることを知ってもらえると、見学の時などにも親子ともスムーズに参加できると思う。
- 受け入れ側の学校に「交流したい」という動機がないと、直接交流の成果は上がらないと思う。
- 特別支援学校の担任の先生が、子供の普段の学校生活の様子のプリントを作ってくれ、副籍校で子供に興味関心をもってもらうのに大変に役立っている。このようなサポートがあるととても助かるので、積極的なサポートをお願いしたい。
- 受け入れ先の学校にもよるが、相手に要求するだけでなく、特別支援学校の子供たちの親も前向きに歩み出す教育をできるとよいと感じた。次の世代にバトンタッチしていくためにも……。我が子の場合は、学童の先生の参加もあり恵まれていると感じた。
- 地域指定校の子供たちも、特別支援学校を見学する機会があればいいと思う。
- 生徒個人の性格があったり、障害の特性もあるので、全員が同じ様な交流をはかるのは正直難しいと思う。できれば、コーディネーターの先生方ともう少し話をして、その学校の様子や本人の個性などを踏まえて、本人にあった交流をはかれるようになると行きやすくなるのではないかなと思う。
- 交流校の生徒から感想などを聞けるとよい。
- 「副籍ってどんなもの？」と同じ学校の保護者によく聞かれる。入学前などに、もっと詳しい説明があったほうがよいのではないかなと思う。
- 学校内のバリアフリーが必要。我が子が通う副籍校は、手助けが必要な階段の昇降に男の先生や職員がすぐに集まって、3～4人で運んでもらえるが、他校では母一人で頑張らなければならない学校もあるらしい。設備がなくても「心のバリアフリー」で気持ちよく協力してくれると助かると思う。
- 「交流をしてもらっている」という感覚が常にある。相手校の担任の捉え方によって交流内容、回数が充実するかどうかが変わってくる。こちら側に要望があっても、交流校に迷惑かと思って言い出しにくい。どちらがリードして、誰が話を進めるのか戸惑うことがある。
- 「居住地交流」という名称から「副籍」という制度に変わった段階から、毎日通っていないけれど「在籍」しているという意味をもつ名前になっているはずと認識している。

(2) 副籍制度を利用していない児童・生徒の保護者から

ア 副籍制度の利用を希望しない理由

- あまりにも力の差があり、かえって目立ってしまい、複雑な気持ちになるので……。
- 同じ年頃の児童とは全く状態が異なるため、直接交流は意味がない。
- 児童館やPTA有志の活動を通じて、障害のない子供と交流が図れていると思うから。
- 近所の方と交流し、余暇活動での交流を通し、地域の人々や子供たちと自然な形でお互いに無理なく接することができる。

- 下の娘が地域指定校に通学しており、学校で開かれる行事の全てに子供を連れて参加できる環境にある。また下の娘は友人をよく家に招いているため、息子も交えて遊んでもらっているの、今のところは利用の必要性を感じていない。
- 一年間で1日や2日交流があったとしても友達になれるわけではなく、中途半端で効果が感じられない。
- 時間が短すぎて交流を深めるまでに至らない気がする。もう少しお互いが深くかかわればと思う。
- 小学部のときに利用したが、年に数回の直接交流ではお客様状態で、「在籍校の授業を受けているほうがよい」との本人の希望から利用をやめた。
- 小学部では利用し、お互いの学校でいい交流ができたが、中学部になると時間を取ることができない。本当は引き続き副籍制度を利用したいが・・・。
- 学校に兄弟が通っている。不必要に話題になりたくない。理解のない人も多し、理解を求めるのも難しい。
- 本人のためにはいいことだと分かってはいるが、兄弟の立場を考えると今は（利用について）考えることができない。
- 仲良しの人にしか妹の障害のことを教えていないため。
- 上の兄弟が中3の思春期の中、同じ学校に副籍を置くことが双方にとってプラスにならないと考えたため。
- 以前、直接交流をしたが学校により温度差があり、せつかく1年生からやっているのに、お客さんのように構えられ、相手の先生方にも迷惑そうな顔をされた。子供たちはすごくよくしてくれたのに、先生方、学校側の対応にすごく嫌な感じがした。
- 学校によって副籍の内容が違うから。手厚い学校もあれば、プリント交換のみの学校もあると聞いた。統一感がないことに不安を感じ、利用していない。
- 小学校では利用していたが、こちら側からアプローチしても相手校の理解が得られず、精神的に厳しいものがあった。中学校になると子供達も思春期に入り、より難しいものになると思い、利用しないことにした。
- 今はまだ友達に関心がなく、音や大きな声が苦手で、慣れない場所や慣れない人に対して情緒不安定になることが多いため。
- 副籍制度は必要だと思っているが、うちの子の場合は、地域の学校との交流が本人にとって辛い経験になることが予想されるので希望しない。
- 付き添いなど、時間的に制約され、生活に対して無理が出るため。
- 交流をしたいが付き添いが難しかったり、行事の内容についていけるとは思わないので、かえって負担になる。
- 移動が大変。車での来校は控えて欲しいと言われた。車いすを押して徒歩で通うのは大変である。
- 重度障害があり、地域指定校と交流を持つことが、親子共々心身ともに負担があるため（学校訪問時に付き添わなければならない、地域指定校の子供に障害の説明等が求められる、兄弟に精神的な負担がかかるなど）。
- 小学校の時に学童を利用していたが、障害のない子供達からかなりのいじめにあったので、前向きには考えられない。
- 「副籍制度を利用してみてどんな効果があったのか」が見えてこないので踏み切れない。プラスの感想もあるようだが、実際に聞こえてくるのは、あまり良くない感想が多い。
- 副籍制度はとても大切だと思うが、それぞれの障害の程度の幅が広く、うちの子供は日々

の体調管理等が重要であるため、とても交流などできない。子供の理解度にも差があるため、受け入れる側の体制がきちんとしていないと副籍の意義がないと思う。社会・学校・大人・教師の障害者に対しての認識や理解が求められると思う。

イ 副籍制度の利用に向けた意見・要望など

- 付き添いの負担が軽減されれば利用したい。
- 親が副籍校までの送迎をしなければならないことから、副籍を諦める人をたくさん知っている。学校側の配慮か、もしくはヘルパーを利用できるとよいと思う。
- 定期的な直接交流が希望だが、親が仕事をもっていると不可能。ボランティアや両校の先生方でサポートしてくれるとありがたい。
- 学校がバリアフリーになっていないので、多くの先生方に車いすを持ち上げて手伝っていただくことになり申し訳ない。
- 地域指定校にはスロープ又はエレベーターがないので負担がかかる。上の階に上がる何らかの方法があれば行きやすいと思う。
- 受け入れる学校の先生や生徒・保護者が、もっと副籍制度の在り方、障害への理解が広がれば考えてみたい。
- 結局は親がかりで（送迎から通訳まで）全てしなければならないという負担に思う気持ち強い。相手校の受け入れの期待度がまったくわからない。望まれていないのに行く気にはならない。
- 地域指定校の先生や子供たちが、どれくらい理解をして受け入れてくれるか不安である。
- 地域指定校で、ソフト面の受け入れの体制や配慮が整ったり、地域指定校の先生方の考え方や、子供との交流の仕方がもっと前向きにならないと、付き添っている親のストレスが溜まる。地域指定校の先生方から「大変ですが…」とか「難しい…」とかという言葉を聞くと精神的につらい。
- 障害児もそれぞれ状態が違うので、副籍が有効だと思われる子供はすればよいと思うし、あまりそう思わない子供はしなくてもよいと思う。全員が副籍をもたなければいけないという体制をとるのはやめて欲しい。
- 重複障害があるなど重度の子供は副籍よりもむしろ他種別への通級、交流などを用いた学びの保障が必要であり、「地域のつながり」は他の場面でも保障できると思う。子供同士の交流を親が望めば副籍は必要だが、全ての人が副籍というのは疑問である。
- 副籍以外にも健常児と関わる機会がもてるのであれば、副籍に拘らなくてもよいと思う。各家庭の事情があるので任せればよい。
- 副籍を置く学校によって交流内容に差がありすぎる。地域の中で自分の子供に認識を持ってもらいたいと思っている親は多いと思うが、交流に差があってはあまり意味がないと思う。
- 理念として素晴らしいと思うが、実際の現場、受け入れ先の理解のなさは驚くほど。圧倒的な温度差を乗り越えていく気になれない。
- 副籍をもったからと言って、名簿に名前が載るだけであれば意味がない。直接交流を定期的に行える等、お互いの顔を知り、障害についての知識を共有できるようにサポートして欲しい。
- こちら側としていろいろアプローチしているし、親として共生社会の形成は本当に有り難いことであるが、受け入れ側の準備が整っていないように思う。たぶん、多くの人があ

れやこれやと希望しているわけではないと思うので、「まずは同じ空間を共有して」ぐらいに構えずに迎えてもらえれば副籍のハードルも下がるように思う。現在、学校によって対応に大きな差があるのも残念に思う。普通級と違って評判によって決めるのではなく、副籍は学区の学校に行っこそ意味があるものだと思う。だからこそ、受け入れ側のさらなる理解を心から願う。

- 受け入れ側の大人たち（職員、保護者など）が、障害をもつ子供やその親を本当に理解し、受け入れ態勢をしっかりとし、副籍制度を理解して交流をしていかないと無理だと思う。わざわざこちらから頭を下げて、申し訳ない気持ちで行くくらいなら、行かないほうがよいと思う。
- 間接交流は意義を見出すことができない。保護者が地域指定校へ連れて行き、その後は地域指定校の先生が付き添って、障害のある子供と接してみてもどうか。保護者は見守り、先生が困っているようならアドバイスを。サポートしてくれる先生の上手・下手ではなく、子供達の交流がねらいだということを念押しする必要がある。
- 児童・生徒及び保護者にとって負担が少なく、良い交流のできる状態であれば積極的に活用すべきだと思うが、受け入れる側の理解が得にくい場合や障害特性によっては、独自の問題行動や社会性に合わない行動が、悪い印象になってしまいがちであると思う。しっかりとした交流でなければマイナスになる時もある。
- こちらが熱心でも、相手先の先生や子供達の気持ちとの温度差が出てきてしまうのでは・・・と心配になり、副籍を希望できずにいる。
- 受け入れ体制の整った学校、もしくは受け入れる意思のある学校への副籍ならば希望する。そうでなければ、子供には無意味なことであり、親は傷付くだけである。
- 特別支援学校側のコーディネーターの負担が大きいのに比べて、地域指定校側での副籍児童の受け入れは、各校の担任教員に任されていて、学校としての体制ができているとは言いがたいと思う。制度の趣旨を生かすため、指定校側での研修や事例紹介まで充実させて欲しいと思う。
- まだまだ、副籍制度の認知度が低いと思う。副籍の有無にかかわらず、定期的な勉強会や講演会などを地域の学校で開いて、障害への理解や副籍制度が広がってくれればと思う。
- 受け入れ自治体の温度差がありすぎる。もう少し都教育委員会と区市町村教育委員会の交流をしっかりとしたほうがよいのではないか。
- 副籍制度は、ある程度コミュニケーションがとれる子供の場合はとても大事だと思うが、それが難しい子供にとってはどうなるのだろうと思う。兄弟がいる家庭においてははじめ問題に発展しないかなど、障害のある子供に対し全員が前向きに捉えてくれることはまずないだろうと思ってしまう。
- 副籍校に通うのは大変であったが、子供たちに我が子の存在を知らせ、「障害とはこういうもの」という教育をしてもらい親としても勉強になった。我が子にとってもたくさんの同年代の友達と接することはとても意味のあることである。子供が地域で生きていることを感じられる。
- 副籍制度はよいと思うが、障害の理解など親・子供にもっと深めてもらい、もっと知ってもらったり、分かってもらうことを先にやって欲しいと思う。もちろん、そのためには障害のある子供をもつ親として協力したいと考える。

(3) 都立特別支援学校の教員から

ア 印象に残っていること

- 間接交流なので、お便りの交換が主である。保護者の前向きな交流に対する姿勢があり、うれしく感じた。
- はじめはお便り交換にも緊張していた児童が、月1回の経験を繰り返して積み重ねることにより、地域指定校や担当の先生方に慣れることができたことがあり、自閉症の子供にとって大きな成長だと感じた。
- お互いの教員が忙しい中でも、思いやりをもってやり取りする気持ちをもつことが大切である。気持ちがつがなっているなど感じられるときには、副籍交流の意義を感じる。
- 合唱練習に参加した際に、副籍校の生徒が温かく声をかけてくれて、本人も保護者も有意義であったと言っていた。
- 副籍校の児童が、本校の児童のまわりに集まって話し掛けてくれたことが印象的であった。バリアフリーは小さい頃からの行くことが大切だと感じた。
- 副籍に行くことで、地域指定校の子供たちが挨拶をしたり、声を掛けたりしてくれるのが嬉しい。
- 地域指定校の児童から手紙が届き、(本校の)児童がとても喜んでいた。
- 相手校がとても手厚い受け入れ方をしてくれ、保護者が感動のあまり涙していた。(交流最終日にはみんなで花道をつくってくれた。)
- 子供たちが積極的に関わってくれたり、先生方がいろいろに配慮してくれたりするので助かっている。
- 保護者が地域指定校の保護者会で子供の障害について話した。また、みんなと歌うことをしなかった児童が、交流時の音楽の時間に一緒に歌ったり、言葉でやりとりしたりできるようになってきた。
- 書初めの課題を副籍校から教えてもらい、一生懸命取り組んでいた。副籍校に掲示してもらい、学校だよりも載せてもらった。
- 地域指定校の教員や生徒が、特別支援学校の児童・生徒の個性を理解しようとする姿勢を示してくれた。
- 学校だよりで本校の児童の紹介をしてもらい、保護者がとても喜んでいた。
- 地域指定校において、本校にはない部活動に参加させてもらっている。生徒にはとてもプラスになっている。
- 6年間、全校集会で自己紹介を積み重ねてきた保護者の方が、「6年生だから何かを残すことができないか。うちの子のためというよりも相手の6年生のために」という思いを出してくれたことが印象的で、まさしくそうだと思った。
- 交流によって、障害をもった生徒に対する関わり方や考え方が変ってきた生徒を多く見えてきた。
- 地域指定校の生徒が、自発的に本校の生徒に声をかけてくれたり、手伝ってくれることがあり、学校として障害のある子供への理解が進んでいると感じる。
- 交流を通じて人前で話したり、他者と関わりをもつ場ができるのは担任として嬉しい。
- 副籍制度そのものについての説明が校内で行われていないので、全体的に理解が低い。しっかりと文章化し、各教員への配布、周知をしていく必要がある。
- 小学校低学年の時は楽しく交流できていても、小学校高学年になるとコミュニケーション

ンの難しさを感じ、交流をやめてしまうことがあり残念に思った。

- 交流を意義あるものにするには、受け入れる小学校の協力が不可欠だと感じる。教員同士の連携を上手にとっていくことが大切だと感じた。
- 実態として中学生の難しさを感じる。小学生の時の交流とは違い、交流しやすい授業が少なくなることと、現在の中学生の実態としての難しさを感じる。
- 保護者や教員が、地域指定校の現状を知るよい機会となった。
- 交流校の子供が手話を覚えて話かけてくれることが嬉しい。
- 生徒本人が交流後に、楽しかった反面で自分とのギャップを改めて感じ、落ち込んでいたことがあった。

イ 副籍制度の充実に向けた意見・要望など

- まずは管理職の理解が大切だと感じる。それによって受け入れ学級の担任の対応が左右される。
- 小・中学校の先生方の理解推進に努めて欲しい。どちらの子供にも意味のあるものでなくてはならない。特別支援教育コーディネーターだけでは限界がある。
- 地域指定校の中で、学校全体としての副籍や特別支援教育について研修する機会をもって欲しい。
- 副籍を担った教員やコーディネーターだけに責任を押し付けず、学校として受け入れて理解、推進につなげてもらえるほうが、教員・コーディネーターの負担が軽減され、副籍制度の定着になると思う。
- 地域指定校の先生方に特別支援学校の学校見学会などに参加していただき、児童・生徒のようすや授業内容を知って欲しい。
- 交流をして「いいな」と感じた保護者の意見などをPTAなどで発表するとよいのでは。生の声が一番響くと思う。
- 低学年のうちから直接交流すると、交流校の児童の抵抗感がなくなると思う。高学年になって初めて直接会うと、積極的に関わろうとしてくれる子が少なく思う。
- 小・中学校の立場に立ったリーフレットを作って欲しい。
- 都教育委員会から、小・中学校の校長、副校長、コーディネーター、教員に、副籍や特別支援学校に通う子供達の研修などをして欲しい。特別支援学校も必要であるが・・・。
- その場しのぎ的な副籍制度ではなく、特別支援学校に通う生徒が地域指定校でしっかりと居場所を確保し、生徒の中で存在が確立できるようなシステムを構築できるようにしていく必要がある。年に3回はあまりにも少ない。各自治体が指定校任せではなく、しっかりと主義や理念を伝え、積極的に各校に介入していく必要がある。
- 就学前施設の指導者もこの制度を知る機会があればと思う。特別支援学校への就学が望ましいと思われる保護者に対する重要な情報提供になると思う。
- 事前に「出前授業」をすると、地域指定校の先生や児童の理解がぐっと深まると思う。
- 「出前授業」は、特別支援学校と地域指定校の双方にメリットがある。小・中学校では、道徳や総合的な学習の時間として有意義なようであり、良い評価を得ている。
- 小・中学校の場合、年齢が高くなるほど交流は難しくなると思うが、道徳教育・徳育教育の一環として大事にして欲しい。
- 個々の教員間での副籍制度に対する温度差が大きいと感じる。直接交流の場合、実際にどのようなことができるのか、モデル（冊子など）があると地域指定校の先生方もイメー

ジしやすいのではないか。

- 障害の程度ごとに、「こんな交流を行ったところ、こんな良い結果が出ました」というような例があれば教えて欲しい。
- 子供の生活圏を広げる良い機会になると感じる。教員のちょっとした配慮の積み重ねで、児童・生徒に実りのある経験につなげることができるのではないかと思う。
- 特別支援学校の教員が「お願いして協力してもらっている」感がある。
- 無理に授業に入らず、給食や掃除の交流もやってみてよいと感じた。中でも掃除は、低学年の子供でも支援の方法が分かりやすいようで、自然な形で交流ができていた。
- 書類・連絡他の事務量が減り、もう少し内容についても相談や準備に時間を使えるとよい。在籍校の教員が同行しやすいシステムが全都的にあるとなおよい。副籍の充実に向けて各校が工夫しているものを共有できるとよい。
- コーディネーターとして副籍を利用している全児童・生徒の書類に対応するが、区教委・保護者・地域指定校との書類のやりとりが煩雑すぎる。あまりにも煩雑であり、また区によって様式もやり方も違う。
- 受け入れ先の学年の雰囲気というのが大きく違いを生むようである。仕方ないことであるが、もっと「全員が副籍をもっている」という環境があれば、地域指定校の中学生でも自然に「そういうものだ」という意識がもてるのではないかと思った。
- 副籍を進めるには、保護者が「学校にやってもらう」というよりも、保護者が自分の力で地域に情報発信する必要があると思う。
- 根気よく続けていくために、学校が家庭をどのようにサポートしていけばよいのか。「基本は家庭」という考えを根付かせるためにはどのようにしたら良いのか。
- 各校のコーディネーター間の連携と専門性の向上を図るような研修を充実させて欲しい。
- 学級担任の同行は大変であるがとても意義があるので、今後も続けられるようにして欲しい。
- 副籍の前提として、所属している特別支援学校における安定した登校実績が大切であると思う。
- スタートした当初よりも副籍制度は浸透してきた印象はあるが、相変わらず保護者は「本当に受け入れてもらえるのか」という不安を抱えている。
- 保護者、教員が不安に思っている反面、子供同士で関わらせたほうがとても充実する交流になる印象を受ける。地域指定校の教員に特別支援学校の様子を見に来てもらうだけでも印象は変えられると思った。
- 地域で共に生活していくための足掛かりとして重要な施策だと思う。ぜひ発展的に進めていきたいと考える。
- 学年が上がるにつれて交流が難しくなっている。(教科での交流) うまく交流を続ける方法があればよいが・・・。
- 共生社会に向けて必要なことであるし、今後も続けていきたいが、全員が副籍をもつという方向性には疑問を感じる。障害のある子供の家族には様々な背景があり、形骸化した間接交流が増えてしまわないか危惧される。
- 保護者から、「副籍交流を進めたいが、共働きのため交流校へ連れて行くことができない」という声があった。ボランティアを活用するなどして、副籍交流を活発化できるようになるとよい。

(4) 地域指定校の教員から

ア 印象に残っていること

- 学級の子供の刺激になっている。本校児童の障害に対する理解が深まった。
- 交流を通じて特別支援学校への理解は深まり、ともに遊ぶことでクラスの気持ちが一つになった印象があった。
- 継続することにより、子供達はより信頼関係を深めていけると感じる。
- クラスの子たち達はとても楽しみにしていて、障害についてみんなで考えるきっかけとなった。
- 特別な支援が必要な児童が本籍校で学習指導を行い、学習保障をしながら、居住地にある公立小学校で副籍交流を行い、地域に当該児童がいることを理解させることは意義があると思う。
- 交流活動のあと、学校外で顔を合わせた時に互いに挨拶を交わすようになった。相互理解のため、副籍制度は意義があると思う。
- 副籍をもつ生徒の顔が見えないと実感が湧かない。姿を見られる交流の場は、成長などがわかって嬉しい。
- 交流が益々進んで、現在のように保護者同席の参加ではなく、子供だけで参加できればよいと思う。
- 重度の障害の子であっても、入学時から交流することで子供同士の理解が深まる。小さいうちからの交流が有効だと思う。
- 私の場合は3年間の交流なので、成長を知ることができて嬉しく思っている。続けるのがベストだと思う。
- 地域の中に学校の違う友達が増えたという感覚で接することができており、交流の時間は楽しく過ごしている。
- 学区域に住んでいても、なかなか交流のない子供同士が地域に帰ってから遊んだり、言葉をお互いに交わしたりするという関わり合いができるようになってきている。
- 主に図工で交流しているが、作品ができて褒められるととても喜んでくれる。学級の子供達の関わり方もとても良い。
- 算数の授業に参加してもらった時、とても嬉しそうに授業を受けてくれて、こちらもやって良かったと思った。
- 交流を通して副籍校の児童が学ぶことは多い。両校の状況に合わせてやりやすい方法で続けていけるとよい。
- 障害のある子供の接し方に、とても気を使っている児童の様子が見られた。低学年から交流を実施することが大切だと感じた。
- 運動会や音楽交流の時、まわりの子供達が手を引いたり、声を掛けたりする姿が印象的であった。
- 特別支援学校の子供が交流校のクラスの子供たちに会って嬉しさを表現してくれることで、クラスの子供達も迎えるよさを感じられた。
- はじめは全然交流できなかった特別支援学校の児童が、3年後にはクラブ活動や行事にまで参加できるようになり、やっていた良かったと思った。
- 昨年の音楽会ではマラカスを担当してくれ、リズムに合わせて演奏できたり、コミュニケーションが取れたり、以前の様子から比べると大きな成長が見られているようである。

イ 副籍制度の充実に向けた意見・要望など

- 双方の生徒にとって、共生社会への一歩となるよい経験のできる機会であり、中学校側の受け入れ体制が整っていれば、もっと直接交流を進めていってもよいと思う。
- 両校が連携して無理のない範囲で、一步一步できることから交流活動を継続して相互理解が深まっていくことが大切だと思う。
- なかなか打ち合わせができなかったり、適度な交流の機会がなかったりしているが、通常級の子供達にとっても大変貴重な機会であると考えています。無理のない範囲で継続していきたい。
- 地域で、支援が必要な子供を見守ることは大切である。互いがストレスなく自然に交流できる工夫が必要である。都教育委員会や市教育委員会にも望む。
- 特別支援学校の先生方と協力しながら進めていくことで、教員の資質にとっても、通常の学級の子供にとってもよい機会となる。できる範囲で今後も直接交流していけたらと思う。
- 書類上のやり取りを減らし、本籍校と副籍校がより柔軟に対応できるように改善して欲しい。
- 手続きなどで1学期は交流するのが難しい。手続きなどがもう少し簡単になれば1年を通して交流できると思った。
- 小・中学校に来てもらうだけでなく、特別支援学校をこちらの生徒が訪問する機会があってもよい。
- 小学校に、副籍を含む特別支援教育の考え方を浸透させるのは並大抵のことではないと思う。副籍の実施に当たって、予算も人もつかないのは承知の上であるが、せめて研修はセットで実施して欲しい。
- 個の担任の考え方により、対応が変わってしまうことが残念な点で、よい先生に当たるかどうかの問題になってしまう現状は変えていかなければならないと思う。
- 学校ごとに任されているので、工夫して進めていくのが大変でもある。実践事例などがあると、活動を考えていくときの参考になる。
- 高学年になるに連れて交流内容が難しくなる。事例等の提案が、特別支援学校側からも具体的にあるとありがたい。
- 多くの教員に制度を知ってもらい、実態を見ること、体験することが大事。ただ、様々な児童が学級におり、困難な場合もあるので、打ち合わせを大切にしていきたい。
- 保護者の引率がなくても担任の引率で交流することができると思う。全ての子供に機会を与えたい。
- 同じ地域に住んでいるので、将来のことを考えれば何らかの形で子供たち同士の関わりがもてるのが望ましい。
- 場の設定や連絡等で担任の負担が大きい。
- 直接交流をする生徒の人数が増えると、場の設定や連絡調整が難しくなる。
- 目指す方向はよいと思う。いつ・どのように行うかを現実的・具体的に検討する人的機能が機能するとよいと思う。学級担任では負担である。

副籍制度充実検討委員会検討経過

| 平成23年度 | |
|--------|--|
| 第1回 | <ul style="list-style-type: none"> ○ 平成22年度副籍制度による交流活動に関する実施状況調査 ○ 副籍事業の成果と課題について |
| 第2回 | <ul style="list-style-type: none"> ○ 副籍制度の課題について ○ 副籍制度のあるべき姿、副籍制度を円滑に実施するアイデア等について ○ 今後の副籍制度の在り方について |
| 第3回 | <ul style="list-style-type: none"> ○ 副籍制度の課題について（保護者の立場から） |
| 第4回 | <ul style="list-style-type: none"> ○ 新ガイドラインに盛り込む内容について |

| 平成24年度 | |
|--------|--|
| 第1回 | <ul style="list-style-type: none"> ○ 「副籍制度の更なる充実にむけて」 ○ アンケート調査の実施について |
| 第2回 | <ul style="list-style-type: none"> ○ アンケート調査結果報告(1) ○ 副籍制度の今後の在り方について |
| 第3回 | <ul style="list-style-type: none"> ○ アンケート調査結果報告(2) ○ 副籍制度の今後の在り方について |
| 第4回 | <ul style="list-style-type: none"> ○ 中間まとめについての検討 |

平成23年度副籍制度充実検討委員会

委員名簿

| | 所属・職 | 氏名 |
|------|-------------------------|-------------------------|
| 専門委員 | 明治学院大学教授 | 金子 健 |
| 専門委員 | 十文字学園女子大学教授 | 岩井 雄一 |
| 専門委員 | 帝京大学准教授 | 砥柄 敬三 |
| 委員 | 都立小平特別支援学校長 | 中原 理晴 |
| 委員 | 都立小平特別支援学校長 | 堂東 稔彦 (H24, 1, 24 ~) |
| 委員 | 都立石神井特別支援学校長 | 千田 恵司 |
| 委員 | 練馬区立大泉北小学校長 | 小島 英樹 |
| 委員 | 練馬区立豊玉第二中学校長 | 長南 良子 |
| 委員 | 小平市立第六小学校長 | 若林 彰 |
| 委員 | 小平市立花小金井南中学校長 | 丹羽 信介 |
| 委員 | 北区教育委員会教育指導課長 | 茅原 直樹 |
| 委員 | 青梅市教育委員会指導室長 | 野村 友彦 |
| 委員 | 港区教育委員会学務課長 | 佐藤 雅志 |
| 委員 | 立川市教育委員会学務課長 | 小林美佐子 |
| 委員 | 教育庁都立学校教育部特別支援教育課長 | 飯島 昌夫 |
| 委員 | 教育庁都立学校教育部特別支援教育課統括指導主事 | 三浦 浩文 |
| 委員長 | 教育庁指導部特別支援学校教育担当課長 | 朝日 滋也 |
| 副委員長 | 教育庁指導部主任指導主事（特別支援教育担当） | 伏見 明 |

| | | |
|-----|---------------------------|-------|
| 事務局 | 教育庁指導部義務教育特別支援教育指導課統括指導主事 | 市川 裕二 |
| | 教育庁指導部義務教育特別支援教育指導課指導主事 | 吉池 久 |

平成24年度副籍制度充実検討委員会

委員名簿

| | 所属・職 | 氏名 |
|------|--------------------------|-------|
| 専門委員 | 明治学院大学教授 | 金子 健 |
| 専門委員 | 十文字学園女子大学教授 | 岩井 雄一 |
| 専門委員 | 帝京大学准教授 | 砥柄 敬三 |
| 委員 | 都立小平特別支援学校長 | 堂東 稔彦 |
| 委員 | 都立石神井特別支援学校長 | 千田 恵司 |
| 委員 | 練馬区立北町小学校長 | 佐藤 璋二 |
| 委員 | 練馬区立豊玉第二中学校長 | 長南 良子 |
| 委員 | 小平市立第六小学校長 | 若林 彰 |
| 委員 | 小平市立花小金井南中学校長 | 丹羽 信介 |
| 委員 | 北区教育委員会教育指導課長 | 茅原 直樹 |
| 委員 | 青梅市教育委員会指導室長 | 野村 友彦 |
| 委員 | 葛飾区教育委員会学務課長 | 土肥 直人 |
| 委員 | 小金井市教育委員会学務課長 | 前島 賢 |
| 委員 | 教育庁都立学校教育部特別支援教育課長 | 飯島 昌夫 |
| 委員 | 教育庁都立学校教育部主任指導主事（就学相談担当） | 伏見 明 |
| 委員 | 教育庁指導部義務教育特別支援学校教育指導課長 | 伊東 哲 |
| 委員長 | 教育庁指導部特別支援学校教育担当課長 | 朝日 滋也 |
| 副委員長 | 教育庁指導部主任指導主事（特別支援教育担当） | 山本 優 |
| 委員 | 教育庁指導部主任指導主事（学力調査担当） | 宇田 剛 |

| | | |
|-----|---------------------------|-------|
| 事務局 | 教育庁都立学校教育部特別支援教育課統括指導主事 | 緒方 直彦 |
| | 教育庁指導部義務教育特別支援教育指導課統括指導主事 | 市川 裕二 |
| | 教育庁指導部義務教育特別支援教育指導課指導主事 | 加藤久美子 |

東京都における副籍制度の充実に向けて

－検討委員会中間まとめ－

東京都教育委員会印刷物登録 平成 24 年度 第 220 号
発行日 平成 25 年 3 月
編集・発行 東京都教育庁指導部義務教育特別支援教育指導課
所在地 東京都新宿区西新宿二丁目 8 番 1 号
電 話 03-5320-6847

